

一般に、哲学は難解なものだというイメージがあるようだ。だから、意味不明で役に立たないという扱いを受ける反面、逆手にとって、高尚なイメージを売り物にするということもできる。知的アクセサリーとしての哲学は、一つのジャンルを形成していると言っていいかもしれない。

もちろんそれは必ずしも悪いことではない。抽象度の高い観念的問題に惹きつけられるのも人の性質の一つだ。その思索の積み重ねが、馴染みのない者に難解に見えることはやむを得ないだろう。

だが、考えるべきものの中には、常人には理解しがたい難解さのままにしておくわけにはいかないものがある。「正しさ」がそうだ。

絶対的な「正しさ」が確定している神権的社会においてすら、「正しさ」はひとびとに理解されなければならない。理解できなければ従いようがないからだ。そして、多元的な価値を承認する民主主義社会において、「正しさ」をすべての者が理解できるかたちで論じる意味は最も大きい。「正しさ」を決める基準である規範のうち、もっとも重要なものは強制的に実現される「法」に定められるが、民主主義社会で法律を決めるのは市民の意思だからだ。

民主主義は決して良い統治形態ではない。民主主義は必然的に衆愚的な傾向を内包している。「正しい」決定をする制度として民主主義を曲がりなりにも機能させるためには、システムの保障があるだけでなく、市民がそのために努力する必要がある。民主主義社会において、「正しさ」を考える知恵はすべての者と分かち合わなければならない。

民主主義を機能させるために市民に要求される素養・能力をわたしはデモクラシー・リテラシーと呼んだことがある。誰もが身につけることができ、また身につけなければならないものとして、リテラシーということばは悪くない。だが、「社会の中で他者と調和してよりよく生きていく」ためのものであることを示すためには、「教養」とい

うことばをつかったほうがいいかもしれない。それは、小手先の技術やノウハウを超えて、人を知り、自分を知り、人と関わる中で自分を高めるべきものだからだ。

だが、そもそも教養は現代においても可能なことなのか。

われわれは今、知的にも物理的にも政治的にも、あまりにも巨大で分断された社会に生きている。社会で起こる出来事に関わる情報は、まず、量的に膨大だ。そして、ほとんどの場合、事態を把握するためには、質的に高度な専門知識が必要になる。さらに、その処理に当たってはしばしば鋭く価値観が対立する。社会問題を適切に処理することは、個人の能力の限界を超えているように見える。教養を、"あらゆる場合に適用できる高度な知識のサブセット"として考えるならば、そんなものはありえないと言うしかない。

だから、重要なのは、社会問題やその要素である事実に関わる個々の知識ではなく、事実をいかに確定するかに関わる知識と技能であり、そうして確定された事実をどう評価し問題を解決していくかに関わる知識と技能なのだ。その中では、そのために社会システムを運用する能力が重要な役割を果たすことになるだろう。

そして、価値観の対立する現実の問題に真剣に取り組むことは、人と真摯に向き合い、自らを見つめ直すことでもある。人はしばしば自分にとって何が重要かを知らず、知っていても適切に表現できない。だから、社会問題における処理方法の選択は、単に出来合いの選択肢から気に入ったものを選ぶという問題にすべきではない。それは、他者を知り、自らを知り、選択肢の意味を知り、可能なら新たな選択肢を創り上げるという動的な問題として考えるべきなのだ。

それらの技能の中核となるものが「正しさ」を扱う能力である。だからこそ、「正しさの哲学」を誰にも分かりやすく・实际的に語ることが必要なのだ - - 世界を欲望と暴力の混沌に委ねないために。